

## M. シェーラーの形而上学

清 水 哲 臣

M. Schelers Metaphysik

Tetsuomi SHIMIZU

### はじめに

マックス・シェーラーの後期思想の中心テーマは哲学的人間学と形而上学という問題である。彼の形而上学は哲学的人間学を介在させるものであるかぎり、両者は密接な関係にある。彼は最初はキリスト教カトリックの立場に立っていたが、こうした宗教的思想世界に対し深く動揺し始め、やがてカトリック的世界観から大きくかけ離れていくことになる。こうした内面的変革のプロセスのなかで、彼の問題意識は徐々に汎神論的形而上学の方角に向かうことになる。この論文の目的は、こうした彼の思想的転向のプロセスを踏まえつつ、形而上学への道を歩み始めるシェーラーの哲学的思索をあとづけてみることにある。これにより、彼の心の内で徐々に熟成してくるシェーラーの最晩年の形而上学的・哲学的世界観の立場を、あわせて明らかにすることにある。

### I キリスト教的思想体系からの転向

シェーラー全集第8巻『知識形態と社会』<sup>1)</sup>は1926年に公刊された。この著作には二篇の大きな論文がおさめられている。それらは『知識社会学の諸問題』と『認識と労働』である。第一論文の『知識社会学の諸問題』は、1924年にケルン社会科学研究所の寄稿論文として発表されたものである。第二論文の『認識と労働』は1926年の上掲著作においてはじめて発表された。『知識形態と社会』の初版序文(1925年11月)において彼は次のように述べる。すなわち、「この二つのより大きな論文は、著者の既刊行物と著者の精神的発展との関連において—それらが論じる特殊な諸対象の固有な価値から独立して—、厳密に方法に関する形而上学的な認識と思惟への入口の門を開くという重要な意味をもつ」(G.W.VIII, S.11)と。そして、この著作の主要な目標の一つは神秘主義やあらゆる種類の反啓蒙主義、同時に実証主義にも反対して、形而上学的な思惟方法の一つの自由な道を切り開いて進むことである。第二に、この著作は著者の形而上学への序論でもある、とする。

1) Max Scheler, *Die Wissensformen und die Gesellschaft*, in: G.W.Bd.8, 2 Aufl., Bern und München, 1960. (以下 G.W.VIII と略記する。) このシェーラー全集第8巻には、第一論文『知識社会学の諸問題』(*Probleme einer Soziologie des Wissens.*)と、第二論文『認識と労働』(*Erkenntnis und Arbeit.*) (以下 Erke. と略記する。)がおさめられている。なおそのほかに、第三論文として『大学と成人学校』(*Universität und Volkshochschule*)が含まれている。

シェーラーが彼自身の形而上学の問題に関心をもち始めるようになった事情について、上掲著作の1925年の同じ序文のなかで引き続き次のように述べている。「最近の5年においてとくに著者の宗教的思想世界が深く動揺したなかで、形而上学が徐々に著者のなかで熟成し明確になってきた」(G.W.Ⅷ, S.11)と。この言葉からさかのぼれば、およそ1921年頃から彼は自らの宗教的思想世界に深い動揺を抱き始め、それと共に彼自身の形而上学的立場の樹立に向けて歩み始めたことになる。

しかし、1921年は、シェーラーの宗教哲学上の主著『人間における永遠なるもの』<sup>2)</sup>が出版された年である。この書物の中心部分をなす論文「宗教の諸問題」は、1918年から1920年にかけて執筆されたものであり(Vgl., Ewig., S.454f.), その副題は「宗教の復興のために」となっている。それによると、シェーラーは第一次世界大戦の隠された原因は、キリスト教的ヨーロッパのうちにあるのではなく、非キリスト教的・反キリスト教的ヨーロッパのうちにあったとする(Vgl., Ewig., S.118)。しかもこの大戦が考えも及ばないほどの苦悩と死と涙に充ちた出来事であったとすれば、今や宗教の復興が強く求められる(Vgl., Ewig., S.103)。シェーラーはこのような洞察に基づき、カトリックの立場から宗教の復興を試みる。ここにはキリスト教カトリックの有神論的立場が貫かれている。

ところで、『人間における永遠なるもの』の初版序文(1920年10月)のなかには、まだ形而上学という言葉も、また宗教と形而上学との関係もふれられていない。しかし、再版序文(1922年クリスマス)のなかで、はじめて形而上学という言葉が意識的に使われてくる。再版序文の終わりの箇所(Vgl., Ewig., S.25)で、シェーラーは宗教と形而上学との相違について述べる。それによると、彼は上述の書物、とくに「宗教の諸問題」のなかに彼の形而上学を見つけ出そうとしたり、彼の形而上学的信念や学説に関して何か本質的なものを受け取るであろうと信じることは、全くの誤解であるという点に注意をうながす。なるほどこの書物のそこここで形而上学に属する非常に形式的な諸命題が引用されているが、それは形而上学と宗教と同時に一致して属している「自己自身による存在者 *Ens a se*」という形式的対象を必要とするかぎりにおいてにすぎない。そのさい、形而上学にとって「自己自身による存在者」という対象は、その具体的な内容の上から、ただ無限に遠い一点に比較されるべきであり、本質的に単に蓋然的で実質的であって、形式的な存在論を超えていく形而上学者のすべての陳述はこの一点に収斂する。これとは逆に宗教的経験は人格を根源的に神性のうちへと移させ、そして神性から、人格が神性に即して経験したのから、世界の意味を理解させようとする。ここでは、宗教に対する形而上学、また形而上学に対する宗教の自立性と無前提性に関する見解が、遵守される。

以上のように、シェーラーは1922年の再版序文のなかで、キリスト教カトリックの観点から形而上学と宗教の相互の自立性および相違について語っている。しかし上述のことからして、この時期にすでに彼の形而上学樹立に向けての問題意識が課題として生じていたことが推察される。カトリックの有神論的立場は、彼の中期の思想(1912-1921年)に属するものであるが、今や1922年の終わりを境として、やがて彼の後期思想(1922-1928年)に至る過程のなかで徐々に汎神論的・形而上学的立場に転向していくことになる。このことを裏付ける彼の言葉は、1年後の1923年に刊行された全集第6巻『社会学および世界観学論集』におさめられた『キリスト教と社

2) Max Scheler, *Vom ewigen im Menschen*, in: G.W.Bd.5, 4 Aufl., Bern und München, 1954, 5 Aufl., 1968. (以下 Ewig. と略記する。)

会<sup>3)</sup>への「序文」(1923年12月)においてみられる。彼はキリスト教カトリック教会の思想体系から遠ざかっていると自ら述べている。この点について彼は次のように言う。「この体系から著者が遠く隔たっている(それはすでに神の理念の内容と基礎づけの形式を含んでいるが)その程度と仕方について、一連の形而上学的諸論文、とくに準備中の『人間における永遠なるもの』の第2巻<sup>4)</sup>がそのうち世間に正確に説明するだろう」(Chri.S.224)と。かくして、シェーラーはキリスト教カトリックの有神論的立場を捨て、形而上学的方向に歩みを進めていくことになる。

## II 知識論と人間形成の理念

すでに取り上げた『知識形態と社会』の初版序文(1925年)において、シェーラーはこの書物が一方で彼の形而上学の入門書であり、また形而上学の企てを正当化すべきものであり、その限りでは将来を指し示すものであるとする。しかし他方でこの書物は同じ問題領域に属する彼のより以前の諸著作とも関連している。彼が挙げた諸著作のうち『知識の諸形態と教養』(1925年)<sup>5)</sup>は「知識種類」に関する学説をより深く基礎づけている。またこの学説は人間形成の理念と過程に密接に結びついており、「著者の人間学と形而上学をすでに予示する若干のヒントを与えている」(G.W.VIII, S.12)とされる。この言葉に示されているが、シェーラーのいわゆる知識論は形而上学と人間学に密接な関わりをもつ。以下、この点について考察の目を向けよう。

『知識の諸形態と教養』は、シェーラーが1925年1月17日にベルリンにあるレッシング学園において行った講演の題目であった。この講演に基づき論文が構成されている<sup>6)</sup>。ここでの主題は知識 *Wissen* と教養 *Bildung* である。シェーラーによれば、現代は、新しい世界を手に入れようと苦痛に満ちて努力するなかで、新たな人間が自分に新しい形式を与えようとしている。その関心の中心にあるのは「人間の教養」の問題であるとしている。それにもかかわらず教養の哲学的本質規定はまだほとんど試みられてこなかった。ここで問題になることは三つある。すなわち第一に、教養の本質とは何か、第二に、教養はいかにして生じるか、第三に、いかなる種類や形態の知識や認識が、「教養ある人間」となる過程を条件づけるのか、という問題である。

まずシェーラーは第一の教養の本質について次のように説く。教養、すなわち「魂の教養 *cultura animi*」を理想的なもの、完成したものとして見るならば、教養はまず第一にそれぞれ個人的に独自の形態、形姿、律動である。これらの限界内でまたそれらの程度に従って人間のすべての自由な精神的活動が経過し、しかしながらまたこの活動によって導かれ方向づけられ、すべての心身上の自動的な生の表現(表現や行為、会話や沈黙)や、この人間のすべての振舞いが経過する。すなわち、教養はこのような人間の「全体的存在」の生成した一つの刻印であり、形姿である。「それゆえ教養は存在のカテゴリーであって、知識や体験のカテゴリーではない」(Wiss.,

3) Max Scheler, *Christentum und Gesellschaft*, in: *Schriften zur Soziologie und Weltanschauungslehre*, in: G.W.Bd.6, 2 Aufl., Bern und München, 1963. (以下 Chri. と略記する。)

4) 『人間における永遠なるもの』第2巻と第3巻は結局刊行されなかった (Vgl., Ewig., S.9)。

5) Max Scheler, *Die Formen des Wissens und die Bildung*, in: *Späte Schriften* in: G.W.Bd.9, Bern und München, 1976. (以下 Wiss. と略記する。)

6) シェーラー全集第9巻の編者 M.S. フリングスは「編者後書き」において、その時の講演内容がシェーラー自身による速記原稿の書き換えや口述による加筆等々により、大幅に修正されている点を指摘している。

S.90) とされる。

教養のある主体の存在には常に一つの世界が、すなわち「マイクロコスモス Mikrokosmos (小宇宙)」が相応し、さらに世界の全体性が相応する。この世界の全体性のなかには、諸事物のすべての本質理念と本質価値が組織化された構成において再び発見されるものと、また一つの絶対的実在的な「マクロコスモス Makrokosmos (大宇宙)」のなかで、人間によってはけっして完全には把握されえない現存在の偶然性において実現されているすべてのものがある。このような「宇宙 Universum」が自己を統合しつつかつ一人の個人的な人間存在のうちに統合されたもの、それが「教養の世界」であるとされる。この意味において、プラトン、ダンテ、カントはそれぞれに自己の「世界」をもっている。人間はただ一つの現実の偶然的な事物を把握することはできないのに、全世界の本質構造を把握することができるのだ (Vgl., Wiss., S.90), とシェーラーは言う。

以上のシェーラーのマイクロコスモスの主張は古代ギリシアにまでさかのぼる。アリストテレスは「人間の魂はある意味において、すべてである」という有名な命題を説いた。マイクロコスモスの理念の歴史はこの命題の提起と解釈を通じてトマス・アキナス、ニコラウス・クザヌス、ジョルダナーノ・ブルーノからライプニッツを経てゲーテへと至った。この理念によれば、部分である人間は世界の全体となるほど現存在の上では同一ではないが、本質の上では同一であり、世界の全体は世界の一部としての人間のうちに完全に含まれている。すべての事物の本質性は人間において交わり、すべての本質性は人間において連帯する。シェーラーはこのことをトマス・アキナスの言葉を援用して、「人間はある意味においてすべてである Homo est quodammodo omnia」と述べる (Vgl., Wiss., S.90)。

ところで、シェーラーによれば、「教養を求める」ということは、自然や歴史において、単に偶然的な現存在や様存在ではなくて、「世界本質的 *weltwesentlich*」(Wiss., S.91) であるすべてのものに愛する情熱をもって存在的な関与をしようとすることであり、ゲーテのファウストとともにマイクロコスモスであろうと欲することである。マクロコスモスが一つの個的人格的精神的な中心、すなわちマイクロコスモスに自己濃縮するというこのような生成、ないしは愛と認識における人間人格のこのような世界生成は、教養という同じ最深の形成過程を異なった方向で考察する二つの表現にすぎない。

かくして、シェーラーは第一に教養の本質をマイクロコスモスの理念から規定したが、これと他の規定を結びつけようとする。彼はおおよそ次のように述べる。人間以下の自然から見れば、教養は人間生成であり、そして同時に同じ経過において、人間やすべての有限的な事物を超えて畏敬すべきものとして現存在し存在するものから見れば、連続した「自己神化 *Selbstdeificatio*」の試みである、と (Vgl., Wiss., S.91)。シェーラーにおいて、人間は自己形成によって神の精神に関連づけられた人間へと生成していく存在と考えられている。それゆえ、彼にとって、常に新たに成長していく人間生成は、「人間化 *Humanisierung*」であると同時に自己神化であり、神性の理念の共同実現であるとされた (Vgl., Wiss., S.101f.)。かくしていかにして教養が生じるかの課題は、マイクロコスモスとしての人間生成において、すなわち同時に自己神化でもある人間化において説かれた。

最後に、いかなる種類や形態の知識や認識が、「教養ある人間」となる過程を条件づけるのか、という第三の問題についての考察に入る。

シェーラーは、「教養の知識」を次のように定義している。「教養の知識は一つのないしは少数の良きかつ簡潔にして含蓄に富む事象の範例において獲得され組み入れられた本質の知識である。

それは同じ本質をもった将来の経験のすべての偶然的な事実の把握の形式や規則、『カテゴリー』になっている知識である」(Wiss., S.109)と。次に、彼は教養の知識ないしは本質の知識がいかにして人間の知識種類の体系のなかに配列されているのかを考察しようとする。それに先立ち、彼は「知識の最も普遍的な最高の概念を確定せずに知識種類について語ることは難しい」(Wiss., S.110)として、まず知識とは何かの考察から始める。このいわゆる「知識論」は後期の諸著作『知識の諸形態と教養』(1925年)、『認識と労働』(1926年)、『哲学的世界観』(1928年)<sup>7)</sup>等において繰り返し論じられている。

それによれば、知識は「純粹に存在論的概念」(Wiss., S.111. Erke., S.203.)によって規定されなければならない<sup>8)</sup>。それゆえ知識は「存在関係」である。しかも全体と部分の存在形式を前提とする存在関係であるとされる。それはある存在者が他の存在者の様存在 *Sosein* に関与する *Teilhaben* 関係であり、そのさい他の存在者の様存在はこの関与によって変化させられない。すなわち、「知られるもの」は「知る」ものの部分となるが、いかなる変化をもこうむることはない。この存在関係は非空間的、非時間的、非因果的である。精神 (*Mens, Geist*) はこのような関与を可能にする「X」、すなわち『「知る」存在者の諸作用の総体』(Wiss., S.111. Erke., S.203)である。これらの諸作用を通して、事物は、より適切にはある存在者の様存在が「志向的存在 *ens intentionale*」となる。これに対して、現存在(実在的存在 *ens reale*)は、この知識関係性の外側に、それを超えた彼岸にとどまる。現存在は知識の対象とはなり得ず、知識の外にある。

ところで、このXの根底にあるものは、すなわち何らかのかたちの関与に導く作用を遂行するための運動を規定する契機は、「自己自身と自己の存在を超越する関与」のはたらきのみであって、シェーラーはこれを最も形式的意味で「愛」(Wiss., S.112. Erke., S.204)と呼ぶ。すなわち、「知る」存在者のなかに、自己から出て他の存在者へと関与する傾向がなければ、いかなる知識も存在しない。この傾向をシェーラーは愛、「献身 *Hingebung*」と呼ぶ以外にはないとしている。献身とは「自己の存在と様存在の限界を愛によっていわば突破すること」(Wiss., S.113. Erke., S.204)と表現されている。かくして「知識は、様存在が精神の外に、すなわち事物のなかにおいても、また同時に精神のうちに一志向的存在あるいは対象として一においても、厳密に同一なものとしてある場合に、そしてその場合にのみ存在する」(Wiss., S.112. Erke., S.204)。それゆえ知識とは事物における様存在と精神における様存在との関係、存在関係にほかならない。

知識はこのように存在関係として捉えられたが、シェーラーはさらにこの知識について次のように述べる。「知識にも、われわれが愛し求めるすべてのものと同様に、価値と究極的な存在的意味が帰属しなければならない」(Erke., S.204)と。この観点から、知識が奉仕することができ、また奉仕すべきである「三つの最高の生成目標」(Wiss., S.114. Erke., S.205)との関連において、シェーラーは知識を三つの基本的な類型に区別している。第一の生成目標は、知る人格の生成と発展である。これに奉仕する知識は「本質あるいは教養の知識」である。第二の生成目標は、世界の生成と世界の最高の様存在と現存在根拠そのものの無時間的な生成である。これらの世界および世界根拠の生成は人間の知識とあらゆる可能な知識において、自己自身の生成使命を達成する。この神性のための知識が、「救済の知識」である。第三の生成目標は、人間の目標と目的の

7) Max Scheler, *Philosophische Weltanschauung*, in: *Späte Schriften*, in: G.W.Bd.9, Bern und München, 1976. (以下 Welt. と略記する。)

8) 以下のシェーラーの「知識論」については、拙著『シェーラーのプラグマティズム批判』安田女子大学紀要第34号、2006年、p. 27-36 参照。



ために世界を実際的に支配し、改造するということである。これに奉仕する知識が、「支配あるいは作業の知識」である。これは実証科学の知識である。

ところで、知識が奉仕する三つの最高の生成目標の間には客観的な序列があるとされる。ここにはシェラーの価値序列の考え方が前提されていることは言うまでもない<sup>9)</sup>。すなわち、彼自ら述べているように、「三つの知識の生成目標の序列は価値様態（聖価値、精神的価値、生命価値）の客観的の序列に厳密に対応する」（Wiss., S.114, Anm.1）ものと考えられている。この考えに基づき、三つの知識が次のように序列される。世界の実際的な変革と、変革のための可能な作業とに役立つ「支配の知識」から、「教養の知識」へと目標の道筋が通じている。この教養の知識によって人間は世界の全体性に、少なくとも世界の構造的な本質的特徴に依拠して、関与しようとすることによって、自己の内なる精神的な人格の存在と様存在をマイクロコスモスへと拡張し発展させる。次に、「教養の知識」からさらに「救済の知識」へと道筋が通じている。人間の人格中心が事物の最高の存在および根拠そのものへと関与しようとするのは、ないしは最高の根拠そのものによってこのような関与が人格中心に与えられるのは、この救済の知識においてである。この救済の知識において、事物の最高の根拠は、自己自身と世界を人間のうちに、また人間を通じて知る限り、自ら自己の無時間的な生成目標に到達するものとされる（Vgl., Wiss., S.114. Erke., S.205f.）。

以上のような知識論を前提として、シェラーは「教養ある人」について次のように総括する。「『教養ある人』とは、事物の偶然的な様存在を『多く』知りかつ熟知している（博識）人とか、諸事象を法則にしたがって最大限予見し、支配できる人ではない。一前者は『学識者』を、後者は『研究者』を作る。そうではなく、一つの人格的構造をわが物にする人である。人格的構造とは、世界や世界における何らかの偶然的な事物の直観、思惟、把握、評価、取扱いのための一つの様式の統一に向けて重なり合わされた観念的な可動的図式の全体である。この図式は、すべての偶然的な経験に先立って与えられており、これらの経験を統一的に処理し、人格的『世界』の全体に組み入れるのである」（Wiss., S.118）。

以上の知識と教養に関するシェラーの主張は、彼の独創的な「知識論」に基づいて展開された。この展開の中には言うまでもなく彼の形而上学的方向性がみられる。

ところで、シェラーの生前に計画された著作『形而上学』第1巻（Vgl., Wiss., S.11, Anm.）は未刊に終わった。しかしシェラーの生前において、彼の形而上学の概略が哲学的人間学との関わりの中なかで比較的体系的にまとまった形で、しかも簡潔に説かれているのが、次に取り上げる論文『哲学的世界観』である。

### Ⅲ 形而上学に至る道

論文『哲学的世界観』は、マックス・シェラーの最晩年の著作であり、彼の死のほぼ2週間前、1928年5月5日付け「ミュンヘン最新情報 Münchner Neueste Nachrichten」の紙上で発表された。それは彼自身によって完結させられた最後の論文となっている。その意味ではこの『哲学的世界観』は極めて短編ではあるが、彼の哲学思想のすべてが簡潔に凝縮されており、彼の思想の集大成とでもいえるべき優れた論文と言える。彼はこの論文において哲学による形而上学の世界

9) Vgl., Max Scheler, *Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik*, in: G.W.Bd.2, 5 Aufl., Bern und München, 1966.

観の形成に向けて、絶対的存在の領域に関わる形而上学に至る道を示そうとする。ここでは他の諸著作ですでに取り上げられた「知識論」が簡潔に整理、論述され、より明確に形而上学樹立への道筋として説かれる。それによれば、シューラーは三重の知識が人間にとって可能であるとして、これらの知識の考察を通して形而上学を積極的に構築していこうとする。「三重の知識とは、支配もしくは作業の知識、本質もしくは教養の知識、形而上学的もしくは救済の知識である。これらの三種類の知識のいずれもそれ自身のためにのみ存在するのではない。各知識種類はある存在者の改造 *Umbildung* に奉仕する。すなわち、事物の改造か、人間自身の教養形式の改造か、絶対的なものの改造かである」と (Welt., S.77)。これら3種の知識はすでに取り上げた内容であるが、ここで特徴的な表現は知識が「改造に奉仕する」という言葉である。これに対し、既述の二つの論文、『知識の諸形態と教養』と『認識と労働』においては、三種類の知識は主として「知識が生成 *Werden* に奉仕する」(Wiss., S.113f., Erke., S.205) という視点から述べられていた<sup>10)</sup>。今や、「改造」という積極的な表現からして、先の引用で取り上げた「絶対的なものの改造」の表現のなかには、絶対的なものに関する最晩年のシューラー自身の明確な内面的変革、また彼独自の形而上学の立場を予想させるものと言えよう。

以下、これらの三種類の知識の考察を通していかにして彼の形而上学ないしは哲学による形而上学的世界観が構築されていくかを跡づけてみる。

第一の種類の知識は、すなわち「作業および支配の知識」は、自然、社会、歴史に対する技術的な支配権に奉仕する。それは実証的な専門諸科学の知識である。この知識の最高の目標は、特定の部門に分類された人間を取り巻く諸現象の空間・時間的關係の諸法則を発見することである。これらの諸法則の探求は世界および人間を支配するためである。

第二の種類の知識は、すなわち「本質および教養の知識」は、アリストテレスが「第一哲学」と呼んだ哲学的基礎学の知識であり、すべて存在するものの存在様式および本質構造に関する学である。この本質の知識において問題になるのは、支配の知識に厳密に対置される知識種類とこの知識に対応する存在であり、固有な方法をもった哲学的研究の巨大な領域である。このことは最近になってはじめてフッサールおよび彼の学派によって再び見つけ出された。支配の知識においては、偶然的な世界の現実性とこれらの様存在の時間・空間的一致の法則が追及される。反対に、本質の知識に関わる研究方向においては、偶然的な時間・空間的な場所やさまざまな偶然的存在が方法的に厳密に度外視される。ここで説かれていることは、シューラーの中期思想を特徴づける彼独自の現象学的立場<sup>11)</sup> とその主張である。以下、彼はこの現象学的立場から本質の知識または本質認識に関する主要特徴と形而上学との関わりについて述べている。

それによれば、本質認識および本質諸連関の認識は、実在的世界の非常に小さな領域を超えて妥当する。「この認識は同時にそれ自体において存在したそれ自身において存在するような存在者にも妥当する。それは『超越的な』広がりを持ち、かくしてあらゆる『批判的形而上学』にとっての踏み切り板となる」(Welt., S.79f.)。次に、本質認識は二重の適用可能性をもつ。第一に、それは実証科学の各領域に対して最高の前提を与え、「本質公理学」(Welt., S.80) を形成す

10) 『知識の諸形態と教養』と『認識と労働』において、「知識が生成に奉仕する」に関連して「改造」という語が一部使われている (Vgl., Wiss., S.114. Erke., S.205)。それは世界の支配と「改造」という意味で、「支配あるいは作業の知識」においてのみである。

11) シューラーの現象学的還元思想は現象学にはじめて形而上学への道を切り開いた。拙著『シューラーの現象学的還元』安田女子大学紀要第16号、1988年、p. 243-253 参照。

る。第二に、シェーラーにとって本質認識は形而上学に至る道を準備することになる。なぜなら世界において、また人間が自己の世界を投企し把握する操作において本質的であるすべてのもの—真の根源現象と理念—、また事物や作用の偶然的な時間・空間的配置が度外視されても、依然として恒常的であるすべてのものは、実証科学の説明に乗り越えられない限界を設定するからである。真正の本質そのものも、真正の本質をもった現存在も実証科学によっては説明も理解もされえない。むしろ実証科学の業績の成功は自分の領域から本質問題を厳格に排除するというにかかっている。これに対し、彼は実証科学を超える形而上学に関して次のように述べる。「それゆえ世界の本質構造と世界の現存在の両者は、最後には絶対的存在者に、すなわち世界と人間の自我の共通の最高根拠に還元されねばならない」(Welt., S.80) と。かくして、シェーラーによれば、哲学によるあらゆる形而上学的な世界観形成の最高目標は、「自己自身による絶対的存在者」を思惟し直観することであるとされる。

上述のことから最高存在の二つの根本属性が知られてくる。すなわち、「第一に、最高存在に帰属しなければならないのは、理念を形成する無限なる精神、すなわち世界と人間そのものの本質構造を共に自己から解き放つ理性である。そして第二には、非合理的な現存在と偶然的な様存在(諸形象)とを定立する同様に非合理的な衝迫 *Drang* である」(Welt., S.81)。これらの精神と衝迫が最高存在の根本属性である。これらの最高存在の二つの活動的属性の高まりいく貫入 *Durchdringung* が、「世界」と呼ばれるところの時間におけるあの歴史の意味を形成する。この貫入は同時に理念や価値に対して元来盲目である創造的衝迫の増大していく精神化であり、他の側面からみれば、元来無力でただ理念を投企するにすぎない無限なる精神の増大していく権力と力の獲得である。このプロセスは人間の歴史においてもっとも明白に行われる。すなわち、人間の歴史において理念と道徳的価値は、利害や情熱と、また諸制度においてそれらに基づくものと組み合わされることにより非常にゆっくりとある「権力」を次第に獲得していくことになるからである。

最後に、第三の種類の知識、すなわち「形而上学のおよび救済の知識」が取り上げられる。すでに見てきた「第一哲学」、すなわち世界と自我との本質存在論は、第三の種類の知識のための踏み切り板ではあるが、それ自身が形而上学そのものというのではない。シェーラーは本来の形而上学に通じる道について、次のような考えを示す。それによれば、現実に向けられた実証科学の成果と本質に向けられた第一哲学とが結びつき、また両者と価値部門(一般的価値論、美学、倫理学、文化哲学)の成果とが結びつくことがはじめて形而上学に通じるとされる。この形而上学は二種類に区分される。まず最初に、実証科学の限界問題に関わる「第一次の形而上学」に導かれ、次に、この形而上学を通して絶対者に関わる「第二次の形而上学」に導かれる (Vgl., Welt., S.81)。この限界問題に関わる形而上学と絶対者に関わる形而上学との間には、なおある重要な部門がある。それは「哲学的人間学」<sup>12)</sup> である。この問題はカントがすべての哲学的根本問題が「人間とは何か」と問う人間学に帰着すると言った問題である。カントが内界ならびに外界のすべての対象的存在がまず最初に人間に関係づけられうると説くのは正しい。すべての存在形式は人間の存在に依存している。哲学的人間学が研究する人間の本質像から一人間の中心から根元的に湧

12) Vgl., Max Scheler, *Die Stellung des Menschen im Kosmos*, in: *Späte Schriften*, in: G.W.Bd.9, Bern und München, 1976. 拙著『シェーラーの「哲学的人間学」の構想』安田女子大学紀要第25号, 1997年, p. 71-80 参照。



き出る精神の作用をもとへ戻って延長していったときに一はじめて、あらゆる事物の最高の根拠の眞の属性が推論されうる。この推理の仕方は本質認識と同様に現代の形而上学の重要な第二の踏み切り板とされ、シェーラーはこの推理の仕方を「超越論的推理方法」(Welt, S.82)と呼ぶ。この推理方法の法則は次のことを意味する。「世界の存在そのものは現世的人間の偶然的な現存在と彼の経験的な意識から確実に独立しているが、しかしそれにもかかわらず、ある部類の精神的作用とこの部類の作用によって接近しうる一定の存在領域との間に厳密な本質連関があるので、われわれのようなはかない存在者にこのような接近を与える作用や操作におけるすべてのものは、あらゆる事物の根拠に帰せられねばならない」と(Welt, S.82)。かくして、シェーラーは精神的作用とそれにより接近可能な存在領域との間に本質連関があるということから、このような人間の精神的作用を元へさかのぼって推論し、それを唯一の超単一の精神作用に関係づける。彼によれば、この精神は根源的存在者の一属性でなければならないし、それは人間において活動し、人間によって成長するものであるとされる。ここにみられるシェーラーの説く形而上学は、人間を起点として、人間を通路とした形而上学である点に特徴がある。

こうした彼の考え方は、次の見解においても端的に示されている。すなわち人間はミクロコスモスであり、物理的、化学的、生命的、精神的存在といった存在の本質的発生のすべては人間の存在において出会い交差しているので、それゆえマクロコスモスの最高の根拠も人間において研究されうると。「またそれゆえ人間の存在はミクロテオス (*Mikrotheos* 小さな神) として神への最初の通路でもある」(Welt, S.83)。かくして現代の形而上学は宇宙論や対象の形而上学ではなく、「メタ人間学 *Metanthropologie*」「作用形而上学」(Welt, S.83)である。そのさいの主要な洞察は次の点にある。すなわち、対象可能であるすべてのものの最高根拠はそれ自らは対象不可能であって、永遠に自己自身を産出する存在の属性として純粋に遂行しうる現実性にすぎないという洞察である。それゆえ、神への唯一の通路は理論的な、すなわち対象化する考察ではなく、神と神の自己実現の生成に対する人間の人格的、能動的な傾注である。すなわち永遠の作用を共に遂行することである。それは理念を形成する精神的活動と人間の衝動生活のうちに感知しうる衝迫の重圧を共にすることである。最高根拠の精神と衝迫という二つの属性を共にする最も純粹かつ最高の有限的な表現が、人間そのものなのである。神を一つの対象に、すなわち事物にすることは、この形而上学にとっては偶像崇拜なのである。ここでは神的なものへの関与は、対象的な関わり方ではなく、神的なもののうちで、神的なものによって、いわば神的なものから生活し、活動し、意欲し、思惟し、愛することのうちにのみ存在するとされる。

かくして、シェーラーは人間を起点とし、人間を通路とする最高根拠への道のなかで、人間に関して次のように述べる (Vgl., Welt, S.83f.)。人間は、それ自体で存立している、あるいは創造以前にすでに神のうちにでき上がって現存する理念界あるいは摂理を模写する者ではない。人間は世界過程においてまた世界過程それ自身とともに生成する理念的な生成結果の共同形成者、共同設立者、共同遂行者である。人間は根源的存在者がそこにおいてまたそれによって自己自身を把握し、認識するところの唯一の場所である。そのみならず、人間は自己の自由な決断において、神が自己の純然たる本質を実現し神聖化することのできる場所の存在者でもある。人間の使命は、自己のうちに完成した完全なる神の「奴隷」や従順なしもべ以上のものであり、単なる「子」以上のものでもある。人間のより高い尊厳は、決断する存在として、神と共に戦う者であり、それどころか神と共に活動する者という点にある。ここにはキリスト教カトリックの立場を離れ、汎神論的形而上学的立場へと転向した哲学者シェーラーの姿がより鮮明に示されている。

## む す び

以上、シェーラーの晩年の形而上学に関する思索過程を考察してきた。キリスト教カトリックの思想世界から遠く隔たり、彼自身の哲学的人間学を構築していくなかで形而上学的立場が徐々に熟成していく。カントはすべての哲学的問いが「人間とは何か」と問う人間学の問題に帰着すると説いた。宗教的な有神論的立場を離れたシェーラーは、晩年において人間を哲学の中心に置き、人間を手がかりとして、また人間を通路として絶対的存在を求めて形而上学への道を歩きはじめた。すなわち人間とはミクロコスモスであり、それゆえマクロコスモスの最高の根拠も人間において研究されうると。またそれゆえ人間の存在はミクロテオス（小さな神）として神への最初の通路でもある。シェーラーにとって形而上学とはまさに「メタ人間学」に至ることであった。彼のこれまでの哲学的思索のすべてが一点に凝縮したシェーラーの形而上学には、ひたすら真理を求め続ける一哲学者の真摯な姿勢が垣間見られる。

## Resümee

Die zwei Hauptthemen Max Schelers in seinen letzten Lebensjahren sind die philosophische Anthropologie und Metaphysik. Unsere Abhandlung ist ein Versuch, die Metaphysik Max Schelers klarzumachen. Diese Abhandlung hat die folgenden drei Gesichtspunkte, um unsere Aufgabe zu ausführen. Sie sind: 1. die Entfernung von dem christlichen Gedankensystem, 2. die Wissenstheorie und Idee der Menschenbildung, 3. der Weg zur Metaphysik. Durch die Betrachtung dieser drei Gesichtspunkte wird Schelers Metaphysik gekennzeichnet. Seine Metaphysik hat zwei Bedeutungen, d.h. zunächst die Metaphysik der Grenzprobleme der positiven Wissenschaften und zweitens die Metaphysik des Absoluten. Zwischen der Metaphysik erster Ordnung und der Metaphysik zweiter Ordnung steht die philosophische Anthropologie. Die philosophische Anthropologie ist der Zugang zur Metaphysik des Absoluten. Der Mensch ist ein Mikrokosmos. Alle Wesensgenerationen des Seins, physikalisches, chemisches, lebendiges, geistiges Sein begegnen und schneiden sich im Sein des Menschen. Darum kann am Menschen auch der oberste Grund des Makrokosmos studiert werden. Und darum ist das Sein des Menschen als Mikrotheos auch der erste Zugang zu Gott. So ist Schelers Metaphysik eine *Metanthropologie*.

[2011. 9. 29 受理]